



契約獣が怖すぎると婚約破棄された
けど、神獣に選ばれちゃいました。
今さら手のひら返しても遅いですよ？

黒木楓
Kuroki Kuruki



RB

レジーナ文庫



🐾ライラ🐾

ウルルと契約している
公爵令嬢。ウルルのことが
大好きで、何事にも
前向きな女の子。

🐾ガデク🐾

ディアスの前に
現れた男。かつて大罪を
犯したことがあるらしい。

🐾クイン🐾

神獣候補の
契約者の一人。

🐾メラナー🐾

ディアスが新しく
婚約者を選んだ侯爵令嬢。
ペガサスと契約している。

🐾ディアス🐾

ライラと婚約していた
王子。ウルルを罵り、
婚約破棄を突きつけた。

🐾ジリク🐾

ライラの幼馴染。
契約獣に関する知識が
豊富で、勉強熱心な性格。

🐾ウルル🐾

ライラの契約獣。
この世界では珍しい、
真っ白な狼。

🐾登場人物紹介🐾

目次

契約獣が怖すぎると婚約破棄されたけど、
神獣に選ばれちゃいました。
今さら手のひら返しても遅いですよ？

書き下ろし番外編

ウルルが神獣に選ばれて一年後

契約獣が怖すぎると婚約破棄されたけど、
神獣に選ばれちゃいました。

今さら手のひら返しても遅いですよ？

第一章 怖すぎる契約獣

「ライラ！ お前との婚約は破棄だ！」

リーオン魔法学園初等部の校庭で、婚約者である王子ディアス・ジエドフ殿下は突然言い放った。

少し長い赤髪をかきあげてから私——ライラ・ファドソを指差し、鋭い目で睨みつけてくる。

ディアス殿下とは婚約者同士だけれど、正直あまり仲がよくない。

親同士が決めた婚約で、ディアス殿下は私を一方的にきらっていた。

だからこれまでも怒鳴られたり、嫌味を言われたりすることはあったけど、それでも婚約破棄を突きつけられたのは、これが初めてだ。

今日は楽しい一日だったのに、最後にこんなことになるなんて。

放課後に呼び出してきた婚約者の発言に、私は啞然としていた。

「ディアス殿下、どうして突然そんなことをおっしゃるのですか？」

「それは……ええと……そうだ！ その契約獣が怖すぎるからだ！」

理由を聞くと、ディアス殿下は少し目をさよろきよろさせてから、私の後ろにいる白狼のウルルを指差して叫ぶ。

ウルルは私の『契約獣』だ。

魔力をもった動物——魔獣と信頼しあい、魔法による契約を結ぶことで、契約獣として自分の相棒にできる。

今日は月に一度の、契約獣を学園に連れてきていい日。

ウルルと一緒にいられて楽しかったのに、台なしにされてしまった。

許せないのは、婚約破棄を告げられたことではなく、ウルルを侮辱されたこと。

「怖い……？ 私のウルルは世界で一番かわいいです！ 怖くなんてありません!!」

「かわいいだとい!? その真っ赤で獠猛な眼をした巨大な狼がか!? 怖いに決まっている!!」

また怖いって言った！

ディアス殿下の言葉を聞いていると怒りが増すばかりだけど、この場は耐えるほうが賢明だ。

こうなったら、この人はなにを言っても聞かないから。

ディアス殿下の周囲にはクラスメイトがいて、こちらを怪訝（けげん）そうに見ている。

ウルルはそんな彼らを警戒し、ぐるぐるとうなり声をあげた。

その姿に、ディアス殿下はいらだちながらも怖がるように一歩後ずさる。

ウルルはどこからどう見ても愛くるしいのに、どうしてそんなに怖がるのだらう。

理解できないでいると、ディアス殿下のクラスメイト——というより取り巻きの人た

ちが、ウルルを見ながらひそひそ話し出した。

「あの巨体で獠猛（とうもう）そうな白狼が、かわいい？」

「恐ろしい……あの瞳にはとてつもない力を感じます。新種のモンスターと言われても

おかしくないはずですよ」

ディアス殿下の取り巻きが、ウルルの悪口を言う。

ウルルがモンスター呼ばわりされて、私は我慢できなかった。

「そんなことない！ ウルルはかわいくて、すごく優しいんだから!!」

ウルルは私くらいの大きさの人なら三人くらい乗せられそうなほど大きいから、そりゃあ初めて見たらびつくりするかもしれないけど、紅い瞳はとってもかわいらしい。

もふもふで、触るとつやつやの綺麗な白い毛並みと、抱きつくと柔らかくて温かくて

安心する、大きな体——怖いどころか、ウルルと一緒にいるだけで私はいつも幸せになる。

それにウルルは、今まで人に危害を加えたことは一度もない。

学校に連れられてくる契約獣の中には、空を飛ぶワイバーンや鋭い角をもつ闘牛のよ

うに、戦うのが得意な魔獣もいる。

それなのに、ウルルだけがそこまで悪く言われるのは納得がいかなかった。

さらに反論しようとした時、バサバサ！ という音とともにぶわりと風が巻き起こる。

そこに現れたのは、美しい翼を広げた白馬——ペガサスに乗った少女だった。

彼女は私とディアス殿下のクラスメイトで、侯爵令嬢のメラナー。

腰まで伸びた白い髪を、今日はいつもと違ってひとつに束ねている。

ペガサスの羽を模した髪飾りをつけていて、きっとペガサスのことが好きなのだろう

な、と思う。

「ずいぶんとにぎやかですわね。いったいなんの騒ぎですか？」

「おお、メラナー。ちょうど今、ライラに婚約の破棄について話していたんだ」

「おほほほ！ 当然の判断ですわ！ 王子の婚約者ともあろう方が、そんな野蛮（やばん）な獣と

契約しているだなんて、ねえ？」

ベガスに乗ったメラナーは、私を見下して高笑いをする。
 飯にもファドソ公爵家の人間である私に対して、侯爵家の彼女がどうしてこんなに強
 気になれるのだろう。

でも、私をあざ笑ったことより、ウルルを野蛮な獣と言ったことのほうが許せない。
 思わず睨みつけると、ベガスの羽がこちらを威嚇するように輝いた。

こちらに敵意を向けるベガスに対し、今まで私の後ろにいたウルルが前に出る。

そして、大きく吠えた。

「ヴァウッ!!」

「ひいっ!」

ウルルに吠えられて動揺したベガスがその場で足踏みすると、メラナーが悲鳴をあ
 げた。

「おっ、落ち着きなさい!!」

慌てふためくメラナーが叫ぶと、ベガスから落ちそうになっていた体が安定して
 いく。

まるで体の一部のようにくっついていているけど、これは魔力によるものだ。

契約獣と契約者は、魔力を使うことでお互いに離れないよう体をくっつかせることが

できるから、落下の心配がない。

けれど、こうして動揺すると魔力が乱れて体を安定させることができなくなって、危
 ない。

メラナーの動揺に触発されたように、周囲の生徒も怯えている。

「な、なんだあの恐ろしい声は!」

「まるで悪魔じゃないか……!」

クラスメイトたちの反応に、私はショックを受ける。

動揺が顔に出てしまったようで、ディアス殿下は笑みを浮かべながら高らかに宣言
 した。

「王子の婚約者にふさわしいのはその悪魔のような獣ではなく、美しいベガスを契約
 獣とするメラナーだ!」

「ディアス殿下のおっしゃる通りです! 私のベガスを怖がらせたこと、絶対に後悔
 させてやりますわ!!」

激昂したメラナーに賛同するように、クラスメイトたちによるウルルへの暴言が校庭
 に響く。

怖いだのモンスターだの野蛮だの悪魔だの、言いたい放題だ。

我慢の限界がきて私が叫ぼうとした時——口に、ウルルのしつぽが触れた。柔らかくもふもふとした白い毛の感触で、少しだけ落ち着く。

『ここで問題を起こして、ライラが困るのはいやだよ』

「ウルル、でも——」

『——僕は平気だから、この場は我慢して帰ろう』

「ウルル……そうね。ありがとう」

契約獣の言葉は、契約者にしか伝わらない。

今さらなにを言っても無意味だろうし、もう帰ろう。

私がウルルの背中に乗ってその場を去ろうとすると、メラナーが声をかけてくる。

「なにも言わずに逃げるなんて失礼じゃなくて？ その獣だって今、私たちの悪口を言っただけじゃないわ」

「ウルルはそんなこと言いません。失礼します」

悔しいけど、ウルルは私のために我慢すると言ってくれた。

耐えよう。

そう決意して、逃げるようにこの場をあとにする。

それでも——やっぱり悔しくて、私はウルルの背中をぎゅっと抱きしめた。

ディアス殿下に婚約破棄を言い渡されたあと。

ファドソ公爵家の屋敷に戻った私は食卓で、家族と食事をとっていた。

屋敷の食堂は広く、ウルルも一緒に食事をしていると、妹のレイラが唐突に口を開く。

「お姉さま、その獣をどうするつもりですか？」

「獣ではなくウルルよ、レイラ。どうするって、いったいなんのこと？」

「私はお姉さまのために思って言っているんです。それは処分すべきではありませんか？」

そう言っただけでウルルを指差すレイラの言葉を、私は信じられない思いで聞いていた。

さすがに見かねたのか、お父さまが呆れた様子でレイラを見つめる。

「レイラよ。ウルルとライラの仲のよさを知っているのに、そんなことを言うのか？」

「それは……あの獣のせいで、お姉さまはディアス殿下に婚約破棄されたんですよ！」
「つい先ほどのことだけど、レイラもあの放課後のできごとを知っている。」

屋敷に戻ってすぐ、家族に今日のできごとをすべて伝えたのだけれど、たぶんあの場面をレイラも見ていたのだと思う。

レイラは私が婚約破棄されたからって、ウルルとの契約を破棄させたいらしい。

婚約破棄のことは事実だからか、お父さまは難しい顔をする。

「たしかにそうだが……契約獣になってくれる魔獣は貴重だ。ウルル自身が問題を起こしたわけではないのだから、そんなことを言うべきではない」

契約の魔法は、ウルルと契約した頃の幼い私でも覚えられたくらい簡単なものだけど、契約相手の魔獣が契約を受け入れなければならない。

どんなに魔法に長けた人でも受け入れてもらえらることは限らず、魔獣との契約において一番難しいのは、相手と契約できるほどの関係を築けるかどうかだといわれている。

だから契約獣が欲しいと思っても、簡単に契約を結ぶことはできない。

それだけウルルの存在は、特別で貴重なものなのだ。

お父さまの指摘を受けても、レイラは諦めようとしなない。

「ウルルちゃ——その獣に、価値があるとは思えません!」

一瞬、昔のように『ウルルちゃん』と呼んだけれど、レイラは意地でも契約を破棄させたいようだ。昔は私と同じようにウルルをかわいがっていたのに、レイラが学園の初等部に入学したあたりから、なぜかウルルを敵視するようになった。

レイラになにを言われても、私はウルルとの契約を破棄する気はない。

婚約破棄のことだけでは説得は難しいと考えたのか、レイラはウルルの悪口を言いは

じめた。

「私、聞きましたよ、あの獣は学園で『モンスター』と言われてもおかしくない」なんて言われていたじゃないですか! みんな怖がってるんです、そのくらい危険なんです!」

レイラが聞いたのは、ディアス殿下の取り巻きたちの言葉だ。ウルルに怯える気持ち（おび）がなかったわけじゃないかもしれないけど、あれはディアス殿下に取り入ろうとしてわざと調子よく言ったようにしか思えなかった。

だけど、レイラが魔法学園に入学して変わったのは、ディアス殿下がそうやってウルルにひどいことを言うから、悪い噂を耳にしたからなのかもしれない。

それならディアス殿下のせいだけだ……それでも、ウルルを貶められるのは許せない。思わず反論しようとした私に、ウルルがくるくると喉を鳴らしてすり寄ってきた。

『ライラ。レイラにそこまで怒ることはないよ。僕は気にしていないからさ』

そう言ってウルルがレイラのほうに顔を向けると——レイラの表情が一変した。

レイラは全身を震わせて、口をパクパクさせている。

そして恐ろしいものでも見たかのように動揺して、お父さまに叫ぶ。

「ううっ……お、お父さま! 見たでしょう!? この獣はこんなに恐ろしい存在なんですよ!」

「ウルルがどうかしたのか？ レイラが指差したから、顔を向けただけだろう。レイラ、少し頭を冷やさない」

「そ、それは……」

お父さまにたしなめられて、レイラはなにも言い返せないでいる。

誰がどう見ても、ウルルがなにかをした様子はない。むしろ怖がるレイラを心配しているくらいなのに。

お父さまの言う通り、ウルルはレイラのほうを見ただけ。

それでもここまで怖がっているあたり、本当にウルルがなにかしたのだろうか？

レイラを注意しようか悩んでいると、お父さまが私に話し出した。

「ディアス殿下に婚約を破棄されたとなると、新しい婚約者が必要だ。私も新しい候補を探してみるが……ライラよ、周りに良い人はいないだろうか？」

「えっ？」

「ディアス殿下との婚約は、私と陛下が勝手に決めたこと。王子なら、ライラにもふさわしいし、将来幸せになれるだろうと思ったのだが……今度は辛い思いをしないように、できるだけライラの意志を尊重したい」

そう言っ、お父さまは申し訳なさそうな表情で私を見る。

ディアス殿下の暴言でショックを受けた私を、気にかけてくれているようだ。

その気持ちはうれしいけれど、今の私にはまだそんなことを考える余裕がない。

「学園であれだけウルルが恐れられている以上、私を婚約者に望む人なんてきつといます。それに、私もウルルを悪く言う方はいやです」

自分で言っ、いやになるけど、今は素直な気持ちをお父さまに伝えておかないと。

どうしてウルルが、怖がられなければならないのか。

私にはまったく理解できず、いらだちと悲しみは増すばかりだった。

私は部屋に戻っ、すぐ、ウルルに飛びつく。

ウルルと二人きりになっ、ようやく本心を口にできる。

「あーもう！ どうして!? ウルルはこんなに優しくてかわいいのに、どうしてみんなあんなひどいことを言うの!？」

信じられないんだけど！

ウルルの大きな体を抱きしめて、もふもふの白い毛皮に身を預ける。

魔力を流すまでもないのだけど、かわいいウルルを離したくなくて、抱きしめる手に魔力をこめてひつつ。

契約者の特権にして、至福の時間だ。

契約者だからといってしつこくしていたらいやがられるかもと不安になったこともあるけれど、こうしているとウルルも心が和らぐと言ってくれる。

なんとか心を落ち着かせたいけど、無理そうだ。

——私は王子の婚約者だから、普段から言動には気をつけていた。

でも婚約破棄を言い渡された以上、もうそんなこと気にする必要はない。

両手両足を本能のままに動かし、ウルルの柔らかな毛並みを堪能する。

落ち着いた。いや無理だ！

私は日々ウルルの魅力を体感しているのに、ウルルを蔑まれたことを許せるわけがない。

「ウルル、私はなにも言い返せなかったわ……ごめんなさい」

「ライラが謝ることはないよ。あの王子は僕に心を開いていなかったし、仕方ない」

今の私は全身でもふもふしているから、ウルルの顔は見えない。

それでも優しく声をかけてくれるのがわかって、ようやく落ち着いてきた。

ウルルはあれだけ悪口を言われても、割り切っているみたいだ。

それでも私は絶対に許せない。

「こんなことされて、私はディアス殿下……いいえ、ディアスを許せない！」

『そうだね。僕もこんなにライラを傷つけたディアスのことは許せない。それでも、僕は報復なんてしないよ』

リスクを考えているのだろう、ウルルはそう言って私をなだめる。

その気持ちに応えたいから、洪々ながら私も我慢することにした。

「そうね、相手は王子だもの。私が許さないと思ったところで、なにもできない」

ウルルと話して、私はようやく落ち着きを取り戻すことができた。

いつもこうしてなだめてくれるから、私は冷静でいられる。

「感情的になりすぎちゃった……ごめんなさい。ウルルは大人ね」

『いいよ。ライラがこうして僕と話して気を楽しみにしてくるなら、僕はそのほうがうれしい』

しつぽを振りながらそう言ってくれるウルルが、心から愛おしい。

出会ったばかりのウルルは小さくて、私の両腕に収まるくらいだったけど、成長した今はウルルのほうが私を包むように抱きしめてくれる。

そんな関係が幸せで——そんなウルルに向けられたひどい言葉の数々が、脳裏によみがえる。

目頭が熱くなって、涙がこぼれた。

「ありがとう……ウルルはこんなに優しい、良い子なのに、どうしてみんなあんなひどいことを言うのかしら？」

忘れたいのに、あの放課後のことをどうしても思い出してしまう。

婚約破棄。

お父さまは新しく婚約したい人はいないか、と私に聞いてきた。

新しい婚約者——あんなことのあとで、すぐ次なんて考えられないけど、望むことがあるとすれば。

「次に婚約してくれる人がいるのなら。ウルルのことを、わかってくれる人がいいな」ふとそう呟くと、ウルルが思わぬ提案をした。

『それなら、ジリクは？ ひさしぶりに、会ってみるのはどうかな？』

ジリク——ゾネット子爵の嫡男で、私よりひとつ年下の少年だ。

生まれてからずっと一緒にいた、私の幼馴染。

二年前、ディアスとの婚約が決まってからは疎遠そえんになってしまった。

王子の婚約者でありながらほかの異性と仲良くしたら問題になるし、ジリクに迷惑がかかる。

だから私からジリクにかかわることはなくなって、きつと向こうも同じ考えだったのだと思う。

でもディアスと婚約を解消した今なら、会いに行っても問題はない。

ジリクは契約獣について私に教えてくれた人で、ウルルのことも大切にしてくれる。

「そうね。ひさしぶりに、会いに行こっか」

気晴らしを思いついただけでもしれないけど、ほかでもないウルルの提案だ。

昔を思い出して——私は、ジリクに会いたいな、と思うようになっていた。

次の休日、私はさっそくジリクに会いに行くことにした。

ウルルに提案された翌日には、お父さまを通じてゾネット子爵家に知らせを送っていただいたのだ。

ディアスに婚約を破棄されて早々、次の婚約者と言ってきたお父さまはせっかちだと思っていたけど、こうなると私も人のことを言えない。

私はウルルに乗って草原を駆ける。

お父さまとお母さまがどうしても言うので、すぐ後ろには護衛を乗せた馬車も同行している。

ウルルは強いから、私たちだけでも問題はないと思うのだけど、仮にも公爵家の娘が契約獣を連れてくるとはいえ一人で出歩くのはよくないだろう。

私は両手両足を広げて、ウルルの背中に全身を預けている。

「こんな体勢でも絶対に落ちないのは、契約者の特権ね」

もふもふとした感触が気持ちいいけど、はたから見たらいつ転げ落ちてもおかしくない状況だ。

それでも安定しているのは、魔力で結びついているから。

白くて柔らかない、太陽の光を浴びたふかふかの毛並みを全身で堪能する。

心地よすぎて眠ってしまいそうだけど、今はウルルとおしゃべりがしたかった。

「ウルル、機嫌がよさそうね」

『うん。ジリクは僕の恩人だからね。ずっと会えなくて寂しかったんだ』

「そうね。私もひさしぶりに会うのが楽しみ！」

ウルルに乗って話していると、あつという間にジリクの屋敷に到着する。

玄関先で執事が出迎えてくれたのだけれど、なんだか困っている様子だ。

なにかあったのか不安になって聞いてみる。

「ご無沙汰しています。ファドソ公爵家のライラです。あの、ジリクは……?」

「申し訳ございません、ライラさま。坊ちゃまは時間になったら出迎えるとおっしゃっていたのですが、書斎にこもったまま出ていらつしやらなくて……」

「わかりました。それなら書斎に向かいます」

私はすぐに状況を理解して、笑顔でうなずいた。

——約束も忘れて書斎にこもりっぱなしなんて、ジリクったらあいかわらずなのね。昔となにも変わらないジリクの様子に、むしろ安心する。

私の返答を聞くと、執事も安堵したようだった。

もしかしたら、しばらく会わないうちに私が高慢なお嬢様にでもなってしまったのではと心配していたのかもしれない。

屋敷の間取りは把握しているから、私はウルルと一緒に書斎に向かう。

白く大きな狼のウルルを連れ歩いても、この屋敷の人たちは怖がることはない。

そもそも、契約者に命じられることがなければ力を振るうことのない契約獣を、必要以上に怖がるほうがおかしいのだ。

屋敷の奥、心なしか静かな空気が流れる一画にたどりつき、私たちは扉を開く。書斎には、本棚の前に立って読書に没頭する少年がいた。

銀色の短い髪が、窓から差す光に煌めいて、まるで一枚の絵画のように美しい。

——ジリク。

私たちが中に入っても、本に夢中でまったく気づいていないようだ。

仕方なく、こちらから声をかけることにした。

「ジリク、なにを読んでいるの？」

「神獣について書かれた本です。次の神獣選定はこのジェドフ国で行われるので——つて、ライラさま。約束の時間は、まだ……あれ、もうこんな時間!？」

本を読んでいたジリクが振り向いて、私と時計を交互に見て目を白黒させている。

ジリクが慌てて本を閉じたので、その表紙が目に入った。

ドラゴンやライオンといった魔獣の絵が描かれた本の表紙を、私はじっと見つめる。

「あいかわらず研究熱心ね」

^{あき}呆れつつも、昔と変わらないジリクにほっとした。

ウルルもうれしそうに喉を鳴らしている。

ジリクはひとしきり謝罪の言葉を繰り返すと、改めて私たちに向き直り、頭を下げた。
「おひさしぶりです、ライラさま。ウルルも成長しましたね」

「僕、昔より大きくなって、結構見た目が変わっちゃったけど、ジリクはあんまり驚かないんだね」



「ウルルはウルルですから」

それから、私たちは応接室に向かった。

歩いている時にふと気づいたのだけれど、ジリクがウルルと会話をしたように見えたのは、私の気のせいだろうか？

契約者である私しか、ウルルの言葉はわからないはず。

けど今は、ウルルがうれしそうでなによりだ。

楽しそうにしつぽを振って歩くウルルを見ると、今日ここに来てよかったな、と思う。

少し歩いて、応接室に到着した。

椅子に座った私はここに来た理由を、正面に座るジリクに話しはじめる。

ディアスから、婚約破棄を言い渡されたこと。

しかもその理由が、ウルルが怖いからだということ。

「ディアスとの婚約を解消できたのは、むしろうれしいぐらいだね！」

半分愚痴ぐちのようになりながら数日前のできごとを話していると、つい本心がもれてしまった。

「なるほど……たしかに、ディアス殿下の行動はひどすぎます」

ジリクは自分のことのように辛そうな表情になって、私に同調してくれた。

そんなジリクを見て、ひとつ疑問が湧いてくる。

昔より成長したウルルを、ジリクは怖いと思っていないだろうか？

さっき、「ウルルはウルルですから」と言ってくれたけど、本当のところはどうなのか、気になった。

私にとってウルルは世界一かわいいけど、ディアスたちにひどいことを言われ続けたせいで、もしかして客観的に見たら怖いんじゃないか、と不安になってしまふ。

そのことを聞くべきかためらっていると、ジリクが先に口を開いた。

「……ディアス殿下が婚約破棄をした理由が、ウルルが怖いからというのは、方便かもしれません」

「方便？」

「はい。殿下がウルルのことを恐れていたことは本当かもしれませんが、それだけで婚約を破棄するというのは、さすがに考えづらいです。それより、メラナーさまの契約獣であるペガサスは、神獣選定の儀で神獣に選ばれる可能性が最も高いと言われています。それが本当の理由なのかも……」

「神獣選定の儀？」

「神獣を選ぶための儀式です。七年に一度、各国持ち回りで行われるもので、その国に住む契約獣の中から神獣候補が選ばれます」

「授業で聞いた気がするわ。たしかもうすぐ王都の神殿でとりおこなわれるんだっけ」
ジリクの説明に、うなずきながら答える。

七年に一度行われる儀式。毎回担当する国が決められていて、その国に住む契約獣から神獣を選ぶらしい。

私が知っているのはそのくらいで、ジリクが詳しく説明してくれた。

「神獣は、この世界に存在するとされている神さまの力を受け取り、膨大な力を得て人や大地を守ります。その神獣候補に、メラナーさまのペガサスが選ばれているんです」
「メラナーのペガサスが、神獣候補？」

神獣選定の儀に参加できるのは、神獣候補として選ばれた契約獣だけ。

私が神獣選定の儀や神獣についてあまり詳しく知らなかったのは、私には関係ないことだと思っていたからだ。

神獣なんてすごいものには選ばれるのは、きっと優秀で実績のある魔法士の契約獣だけだと思っていたのだけど、メラナーのペガサスが選ばれるなら、契約者の年齢は関係な

いらしい。

さらに言うなら契約者の人格も関係ないだろう。あのメラナーが神獣の契約者として称えられでもしたら、ジェドフ国の将来が心配だ。

「神獣となればもちろんですが、候補として選ばれるだけでも十分に誉れ高いことです。おそらく、そのペガサスを得ることが、ディアス殿下の狙いだったのでしょう。それにディアス殿下は第二王子ですが、婚約者が神獣の契約者となれば、次期国王の座も狙えます」

「なるほど。メラナーがそこまで調子に乗っていた理由も、たぶんそこね」

貴族としての格は、メラナーのルロムード侯爵家よりも、私のファドソ公爵家のほうが上。それなのに、メラナーは明らかに私を見下していたもの。

ディアスが突然婚約破棄を言い渡したこともそうだけど、メラナーの言動も気になっていた。

「すべての候補がそろうまで、誰の契約獣が神獣候補に選ばれたかは明かされませんから、ライラさまが知らないのも当然です」

そう言って、ジリクは説明を続ける。

どうやらペガサスが神獣候補になったことは、まだ公表されていないことのようにだ。

それなのにメラナーは、内緒と言いつつ周囲に言いふらしているらしく、それがジリクの耳にも入ったのだという。

大切な秘密を簡単にもらすあたり、やっぱりメラナーが人々に称えられるのはどうかと思う。

侍女が出してくれた紅茶を飲みながら、私はさつき気になったことを、改めて尋ねる決意をした。

聞くべきかすぐ迷ったけれど、やっぱりちゃんと聞いておこう。

「あの、ジリクも……ウルルのこと、怖いつて思う？」

「ウルルは昔と変わらず、とてもかわいいですよ。今はそれに加えて、凛々しくも見えます」

ジリクがそう即答してくれたことで、私はほっと息をついた。

微笑みかけるジリクに、ウルルはうれしそうにすり寄る。

『あの時ジリクが助けてくれたから、僕はライラの契約獣になった。ありがとう』

そんなウルルの言葉を聞き——私は、ウルルと初めて出会った時のことを思い出した。あれは、まだ私がディアスの婚約者になつていなかった頃。

ファドソ家とゾネット家の領地が近かったおかげで、私とジリクはよく一緒に遊んで

いた。

そしてある日、遊びに出かけた先で、弱った小さな白い狼を見つけた。

今にも息絶えてしまいそうな姿を見ても心配することしかできないでいた私に、ジリクは「大丈夫、その子を助けるためにできることをしよう」と言ってくれたのだ。

すぐに魔法士のもとに向かい、鑑定魔法でその白狼が誰とも契約していない野生の魔獣だと確認し、契約獣にしても大丈夫と許可をもらった。

魔力の強い人と契約すれば、魔力を分け与えることで回復するかもしれない。

ジリクは小さな頃から魔獣について詳しくあったけど、あの時はまだ魔法学園に入学していなくて、契約魔法を使うことができなかった。

私は初等部の一年生で、魔法のことは授業で学んでいたから、魔法士の協力のもと、その白狼と契約することになったのだ。

契約を受け入れてくれた白狼を、私たちはウルルと名付けた。

私と契約したことでウルルはすっかり元気になり——今ではすっかり仲良しになったのだ。

ウルルがお礼を言々と、ジリクが微笑む。

「私はたいしたことはしていませんが、どういたしまして」

「ウルルの言葉がわかるの!？」

「契約魔法の応用です。自分と契約していない契約獣の言葉を理解できるように調整してみました」

「平然と言うけど、普通そんなことできないよ……」

完全に不可能というわけではないけれど、それは大人の魔法士でも難しいはずだ。

私は啞然^{あぜん}としながら、ジリクが私と会わずにいた間、なにをしていたのか聞くことにした。

「ジリクって、やっぱり学園でも成績がいいの？」

「恥ずかしながら、実はあまり……。詳しいといっても私が知っているのは魔獣のことだけですし、魔法も契約魔法とその応用を試すばかりで、それ以外はそんなに得意ではないのです」

ジリクは前から魔獣や契約獣のこととなると夢中になってしまうことは知っていたけれど、それは今でも変わっていないみたいだ。

試験の勉強そっちのけで、契約獣について学ばかりのジリク。

学園ですつかり変人扱いです、と事もなげに話すジリクは、穏やかだけれどなんだか無茶苦茶で、私は啞然^{あぜん}としてしまった。

「どうして……そこまで、できるの？」

「私はもつと魔獣や契約獣のことを学んで、いつか魔界にいる魔獣とも仲良くなりたいんです。魔界の生き物は危険と言われ、魔界に干渉しようとすることは罪とされています。でもそれは、彼らのことを私たちが知らないせいだと思うんです」

「知らない?」

「はい。知らないものは、怖いですから。だから私はたくさんのことを学びたい、そう思います」

ジリクと離れて二年くらいだけ……その間に、ジリクは壮大な夢をもったようだ。魔界というのは、この世界とは違う世界と聞いたことがある。危険がいっぱいで、凶暴な魔獣もたくさんいる、って。

だけど、ジリクはそんな魔界の魔獣たちとさえ、仲良くなりたいのだという。

「素敵ね! 私も応援する。なにかあったら協力させて!」

『僕もライラと同じ考えだけど、危険なこととはしてほしくないかな』

ウルルもジリクを応援したいけど、心配な気持ちのほうが大きいみたい。

でもそれは、ジリクのことの大切だからだと思う。

「ありがとうございます。この夢を笑わなかったのは、ライラさまとウルルが初めてです」

「そうなの？」

「はい。普通じゃないようです」

たしかに魔界なんて、普通に生きていたらかわることはない世界だ。

魔法学園の授業でも、魔界のことをしっかり教わるのは高等部の選択科目くらいのはず。

だからといって、人の夢を馬鹿にしていはいはずなのに。

そう思っただけが口をとがらせていると、ジリクが微笑む。

「今日はおもう遅いですから、そろそろお帰りの支度しだくをしましょう。ライラさまさえよければ、また前のようにいつでも遊びに来てください」

「うれしい……けど、あまり私たちと仲良くしていたら、ジリクの迷惑にならないかしら」

「私はもともと変人扱いですから、問題ありません」

「……それはそれで、大丈夫なの？」

趣味に没頭するのはいいけど、周囲から浮いているのはいきすぎかも。

苦笑いする私に、ジリクは真剣な表情で告げた。

「ライラさまに、ひとつお伝えしたいことがあります」

「なに？ ウルルの悪口以外ならなんでもいいわよ」

「まさか。称賛しか浮かびませんよ——ディアス殿下に婚約を破棄されたことや、ウルルを悪く言われたことを、気に病まれるのはわかります。でも、ライラさま。周りの目など気にしないでいい、他人になにを言われても関係ないと、私は思います」

ジリクはまっすぐに私を見つめて、そう言ってくれた。

いつも自分が興味のあることに夢中で、学園でも変人と呼ばれているというジリク。でも、ジリクはそんなこと気にしないで、自分がしたいように生きている。

そんなジリクの言葉は、私の心にまっすぐ響いた。

私を気遣ってくれているのが伝わってきて、温かい気持ちになる。

「ジリクの言う通りね。ありがとうございます」

そうして、私はジリクと会わなかった頃のウルルについて話しながら、帰りの支度しだくをした。

行きと同じように、ウルルに乗って帰り道を駆ける。

もふもふした背中に身を預けながら浴びる風が心地いい。

草原を駆けていると、ウルルが話しかけてきた。

『ライラはさ、ジリクと婚約すればいいんじゃない?』

「えっ?」

突然なにも言い出すのかと驚き照れる私に、ウルルは続ける。

『今日は二人ともずっと楽しそうだったし、お似合いだと思うなあ』

どうやらウルルがジリクに懐いて^{なつ}いるからだけではなく、私のことを考えて提案してくれたみたいだ。

ディアスとの婚約解消が決まって、私は周囲から腫物^{はれもの}にさわるような扱いを受けていた。

そんな中前と変わらないジリクの態度はすごくうれしくて、今日はひさしぶりに楽しい一日だった。

今日のような日がずっと続けば、それはすごく幸せだけど……ジリクは今日、どう思っただろう?

『二人とも昔からお互いのことが好きだったでしょ? でも、ライラがディアスと婚約することになって、二人とも仕方がないと割り切っていたただけだよ』

「と、突然なにを言うのよウルル!」

いきなり両想いだなんて言われて、顔から火が出そうになる。

たしかに——今日ひさしぶりに会ったジリクは昔よりも格好よく見えたり、一緒に過ごした時間が楽しくて、大切なものに感じた。

ジリクは、どうだろう。

私といて、少しでも楽しかったり、うれしかったりしてくれたらいいんだけど。

『ジリクとまた会えなくなってもいいの? 僕はいやだな』

「それは……」

『屋敷に帰ったら、頼んでみなよ。きつと賛成してくれるからさ』

「……言うだけ、言ってみようかな」

迷いはあつたけれど——その日の夜、私はお父さまの部屋に向かうことに決めた。

あれから一週間。

私はウルルに乗って、またジリクの屋敷に向かっている。

あのあと、私は悩みながらもお父さまに相談した。

私の家は公爵で、ジリクの家は子爵。

こちらが婚約を迫れば、向こうはきつと断れない。

だからお父さまさえ納得してくれば婚約することはできるけれど、ジリクはそれを望むだろうか？

それだけが不安だったけれど……ひさしぶりにジリクと会って、また会えなくなると思ったらいてもたってもいられなかった。

お父さまにジリクと婚約したいことを伝えると、こんな答えが返ってきた。

『よかれと思って王家との婚約を決めたが、それがライラにとって辛い結果になってしまったのは私にも責任がある。ライラが望むなら、ゾネット家に婚約を申し込もう。今度こそライラが幸せになれるように』

そう快諾してくれて、ゾネット子爵家にも話を通してくれた。

せっかちなお父さまの行動は迅速で、すぐに婚約は決まったようだ。

私はウルルにぎゅつとつかまりながら、ジリクと顔を合わせたらなにを言えばいいか考えていた。

ジリクとの婚約が決まり、私としてはうれしい。

ウルルの提案を無下にしないでというのもあるけど——私も、ウルルと同じ気持ちだったから。

だけど、ジリクも同じとは限らない。

「承諾してくれたと言っても、お父さま同士が決めたことだから、そこにジリクの意志はないわ。ジリクは本当に私との婚約を望んでくれるかしら？」

『なにを今さら。きつと大丈夫だと思うよ』

「そう、だといけど……」

ウルルに励まされながら、私たちはゾネット家の屋敷に到着した。

今日は訪問理由が理由だからか、ジリクは本を読まず応接室で待っているらしい。

執事に案内されて、部屋に到着する。

ソファーに座った私がどう切り出そうか迷っていると、ジリクは緊張した面持ちで、こんなことを聞いてきた。

「本当に私が、ライラさまの婚約者でよろしいのでしょうか？」

自分が婚約者で、本当にいいのか。

私こそ、それを尋ねようとしたのに……

「……どうして？」

ほかになんとも言えなくてそう口になると、ジリクが続けた。

「私は研究に没頭するばかりで、すぐ周りが見えなくなります。学園でも変人扱いされ

て、成績だつて下から数えたほうがずっと早い、情けない人間です。こんな私との婚約は、ライラさまのご迷惑ではないでしょうか？」

不安そうな顔で、自分のことを卑下^{ひげ}する。

そんなジリクを見ていたら、私も言いたいことが湧^わいてきた。

「それを言うならディアスに婚約破棄された私だつて、学園の誰もが避^さけているわ。メラナーにも馬鹿にされて、ウルルのことだつてひどいことばかり言われて、情けないっていうなら私のほうがずっとそうよ。——私との婚約は、いや？」

「いやなわけではない！」

ジリクは、身を乗り出してそう叫んだ。

敬語を使うのも忘れて、こんな時なのに昔みたいだな、なんて思う。

顔が赤くなるのを自覚しながら、私はジリクに問いかけた。

「それなら——私の婚約者に、なってくれる？」

「……はい！ 喜んで!!」

ジリクは顔を少し赤くしてうれしそうにそう答えてくれた。私もうれしくて笑顔になる。

しばらく二人とも黙りこんで、なにか言おうとして目が合つては、恥ずかしくなつて

そらしてしまう。

そんな私たちを見ながら、ウルルが呟いた。

『本当に、お似合いな二人だよ』

契約獣にしか興味が無いジリクと、契約獣が怖すぎると言われて婚約破棄された私。これからまた誰かに心ないことを言われるかもしれない。

だけど、他人の目なんて関係ない。

私はジリクと婚約者になって、すごく幸せだから。

第二章 神獸選定の儀

私とジリクの婚約が決まり、一ヶ月が経った。

ディアスが婚約破棄を宣言したあたりから、神獸候補が続々と選ばれていったらしい。もう来週には、儀式を経て新たな神獸が決まるようだ。

食卓で朝食をとっていると、あいかわらずレイラが楽しそうに話をはじめ。

「もうすぐ神獸選定の儀ですね。まあ、怖いからって婚約破棄をされたようなお姉さまの契約獣には、関係ない話でしょうけど」

お父さまとお母さまはウルルに優しいけど、妹のレイラは違う。

昔は「ウルルちゃん」と呼んで、一緒にウルルと遊んでいた。そんな姿が嘘のように、今のレイラはウルルを敵視している。

そんな妹に、私はため息をつく。

「そうね」

「学園でもお姉さまはひどい言われようだから最悪です。そんな獣とはさっさと契約破

棄したほうがいいのではありませんか？」

そこまで言うほど評判は悪くないと思うけど、レイラはなんだか話を大げさにしたいようだ。

どうしてそこまでウルルを目の敵にするのだろう。

そんな私たちのやりとりを見かねたのか、お父さまがレイラをたしなめる。

「レイラよ。ウルルは領地に侵攻してきたモンスターを何度も退治してくれている。

ファドソ領に必要な存在だ」

「うっ……で、でもそれだけ力があるということは、人に危害を加える可能性もあるということではありませんか！ もし領地の人々を傷つけでもしたら……」

「そうだった時は、その時に領主である私が判断するだけだ」

お父さまの言葉に言い返せなくなったせいか、レイラは私を睨んでくる。

どんなことがあったとしても、私はウルルとの契約を破棄する気は一切ない。当たり前のことだ。

前のことだ。

目論み通りにいかなかったレイラは、椅子から勢いよく立ち上がった。

「後悔してからでは遅いです！ 私は忠告しました!!」

そう告げると、足早に歩きだし、乱暴に扉を開けて出ていってしまう。

お父さまはため息をつきながら、扉を眺めていた。

「レイラめ、困ったものだ」

「私がジリクと婚約してうまくいっているのが、面白くないのでしょうか……」

ジリクと婚約して以来、学園であからさまに悪口を言う人が減ってきた。

そのこともあって、最近の良いことばかりだな。と思っていたのだけれど……そういうところが、レイラの氣に障るのかもしれない。

そんなことを思いながら、私は朝食を味わっていた。

魔法学園に登校し、今は昼休み。

あからさまな悪口は減ったものの、あいかわらず私は周囲から避けられていた。

教室ではディアスと、彼の新たな婚約者メラナーのもとに生徒達が集まっている。

話題は来週に迫った神獣選定の儀式のこと。

クラスのみんなは、メラナーのペガサスが神獣に選ばれるに違いない、と口々に褒めたたえている。

誰の契約獣が神獣に選ばれるか、なんてことはどうでもいいけど、ディアスとメラナーがさらに増長するのはいやすぎる。

ため息をつきながらも、私は食堂に向かうことにした。

今日はジリクと食堂で昼食を食べる約束をしているのだ。

私が席から立ち上がった時、クラスメイトの声が耳に入ってくる。

「来週の神獣選定の儀で、ディアス殿下の判断が正しかったことが証明されますね」

「前の婚約者ライラさまの契約獣は見るからに凶暴で野蛮な狼。神獣候補に選ばれてもいない」

「それに比べてメラナーさまのペガサスは素晴らしい契約獣ですよ。あの神々しさ、神獣に選ばれるのはペガサスに違いありません！」

「おほほほほ！ 当然でしょう、皆様はよくわかっていらつしやいますわ！」

メラナーはさも楽しそうに高笑いして、得意げに胸を張る。

そんな中、取り巻きの一人が呟いた。

「それにしても神獣候補——予定では七名の候補のうち、決まっているのは六名だけ。残りの一名は、誰の契約獣になるのでしょうか？」

その疑問を皮切りに、取り巻きたちはもしかしたらあの人かも、いやいやあの人だ、と色めき立つ。すると話を聞いていたディアスが、私のほうを見て言った。

「神獣候補はペガサスのほかに優秀な契約獣ばかり、あの恐ろしい狼だけはないだろ

うなあ」

あてつけるような言葉にいらだつ心を抑え、私は教室を出ようとする。

私が公爵家の人間だから、ディアスの取り巻きたちは直接悪口を言っではこない。

それでも話し声は耳に入ってきて、もう慣れたものと聞き流そうとしてしていると——教室に、ジリクが入ってきた。

ジリクが私の新しい婚約者ということはもう学園中に知れ渡っているし、それだけでなくとも一学年下の生徒が教室を訪れるというだけで、視線が集まる。

じろじろと不躰な視線を受けながら私のそばまで来たジリクは、クラスメイトたちを見回して口を開いた。

「ライラさまの契約獣のお話ですか。とても興味深いですね」

「はあ？ ライラの婚約者か、ここになんの用だ？」

「婚約者を迎えに来ただけですが……楽しそうなお話をされているので、私からもひとつ」

ここ数週間で、ジリクは学園でもかなり目立つ存在になっていた。

それはディアスに婚約破棄された私の新しい婚約者ということもあるけど、別の理由もあった。

「先日行われた全学年共通試験の結果はもうご覧になりましたか？ 実はありがたいことに、私が一位をとらせていただきました。ここにいる皆様の誰よりも良い成績を記録することとなりました。落ちこぼれと呼ばれていた私が、なぜ突然こんなに素晴らしい結果を残すことができたか。実は、なにを隠そうライラさまの契約獣のウルと一緒に遊んでいただけで、皆様を超える実力を得てしまったのです」

——らしくもなく流暢にまくしたてるジリク。商人みたいな言い回しだけど、なにか本の影響でも受けたのだろうか。

「はあ？ あの白狼と、それもただ遊ぶだけ？ そんなことで成績が上がったと言うのか!？」

それは、ジリクと婚約して起きた一番の変化だった。

ジリクは遊んでいただけと言ったけど、正確には少し違う。

婚約してすぐ、ジリクの提案で、私たちはウルルに魔法を教えてもらうことにした。教えてもらうといっても、ただウルルの前で魔法を使うだけだ。

魔獣は魔力をもつだけでなく、魔法を使うことができる。

ウルルはかなり魔法の扱いがうまいようで、私たちが使う魔法を見て、アドバイスをしてくれる。

そのアドバイス通りにするだけで、ジリクも私も魔法の実力がとてつもなく向上したのだ。

もはや「遊び」というより「授業」な気がするけど、ジリクは詳しく説明する気がないらしい。

「その通りです。特に魔法の扱いに関しては、高等部の生徒をしのぐほどだと先生方からお言葉をいただきました」

「ぐうっ!？」

話を聞き、教室にいた生徒たちが啞然とする。

このところのジリクは成長著しく、もはや学園一と言っても過言ではないんじゃないかなにかと思えるほど優秀な魔法士だ。

その理由がウルルにあると知って、教室にいる生徒たちから動揺の声がある。

「共通試験で一位をとったジリク・ゾネット——その急成長の理由が、あの白狼？ 信じられない……」

「信じられないとおっしゃられても、結果が出ているのですから、事実です。よろしければ、契約獣がもつ力について私が色々とお教えしましょうか？」

「け、結構です……」

ジリクは笑顔で話すけど、声をかけられた生徒は逃げるように教室から出ていく。

私もジリクと一緒にウルルから魔法について教わったことで、ジリクほどではないけれど、かなり成績が上がった。

ジリクはもともと契約獣についての知識が豊富だから、ウルルの言葉から学べる事が人一倍多いのだろう。

私としては、ウルルとジリクが楽しそうにしているだけでうれしかったのだけど、それがこんな意外な結果をもたらすなんて、思いもしなかった。

ディアスとメラナー、それに取り巻いたたちは悔しそうに黙りこんでいて、そんな彼らをしり目に、私たちは食堂に向かった。

昼食を食べ終え、テーブル越しのジリクは、なんだか前より頼もしく見える気がした。

「ジリク、最近変わったね」

再会するまで、学園にいるのを遠くから見ただけだけど、これまでのジリクは、あまり自分から人と話そうとはしていなかったように思う。

ほかの生徒たちから、ジリクの噂を聞いたことがある。

契約獣のことばかり考えている変人。